

薬学英语学習者の自尊感情と自意識、 自己効力感の関連

児玉典子、細川美香

要 約

本研究では、薬学英语学習者の自尊感情と自意識、自己効力感の関連を調べることを目的とした。まず、薬学英语学習に対する自己効力感尺度を因子分析によって作成した。次に、自尊感情、自意識（公的自意識・私的自意識）、自己効力感における性差を検討するため、 t 検定によって男性と女性の平均値を比較した。公的自意識において、有意差が見られ、女性のほうが男性よりも高い値であった。また、自尊感情と自意識、自己効力感の相関係数から、男性において自尊感情と公的自意識との間に有意な負の相関と、自己効力感との間に有意な正の相関が見られた。

1. 問題と目的

英語のリメディアル教育において、基礎的な学力の向上を目指した授業が重要視されてきたが、清田¹⁾ は学力面よりも学習者の否定的な意識を改善させて自尊感情 (self-esteem) を向上させることが効果的な英語教育につながることを示唆している。自尊感情とは、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚であり、人が自分自身についてどのように感じるかという感じ方である²⁾。自尊感情には他者との比較によって生じる優越感や完全性を含み、自分を「非常に良

* 2022年9月30日受理。

い (very good)」と考える場合と、自尊感情を他者との比較ではなく、自身に対する肯定的または否定的態度として捉え、自身を「これでよい (good enough)」と感ずる場合がある³⁾。後者の場合は比較的安定したものであることが知られており、自尊感情の育成には「これでよい (good enough)」と考えることができる授業の取り組みが必要とされている⁴⁾。

自意識 (self-consciousness) は自己に向けられる意識であり、公的自意識 (public self-consciousness) と私的自意識 (private self-consciousness) の2つが示されている⁵⁻⁶⁾。公的自意識は「自分が他人にどう思われているか気になる」等の質問項目からなり、自分の外的側面に意識が向く傾向を指し、私的自意識は「自分がどんな人間か自覚しようと努めている」等の質問項目からなり、自分の内的側面に意識が向く傾向を示すと考えられている⁶⁾。自身を「これでよい (good enough)」と考える自尊感情の関連要因として先行研究において自意識が検討されているが、研究結果は一致しておらず⁷⁾、これまで薬学英语学習者の自尊感情と自意識についての報告もない。

学業的な自己効力感 (self-efficacy) とは、Bandura⁸⁾ によって定義された概念であり、「指示された教育内容を達成していくための行動を統合し実行する能力を個人的に判断すること」と翻訳されている。自己効力感は、自信に近い概念とされ、「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるか」という個人の確信を表していることから、自己効力感と自尊感情との関連が示されている⁹⁾。

そこで本研究では、これらの知見を踏まえて、薬学英语学習者の自尊感情と自意識及び自己効力感の関連について調査・考察することを目的とした。

2. 方法

2-1 調査対象・調査時期・手続き

2017年5月、薬学英语入門 I を履修する3年生258名に質問紙への回答を依頼し、欠損値のない224名 (男子63名、女子161名) のデータを分析に用いた。質問紙は講義終了直後に学生全員に配布し回答してもらった。質問紙の配布の際、回答が任意であること、成績とは無関係であること、

個人が特定されないように分析は匿名化するなどの配慮することを口頭で伝えた。統計的分析は、SPSS Statistics 26を用いて行った。

2-2 質問紙

自尊感情については、山本ら²⁾による自尊感情尺度 Rosenberg³⁾の自尊感情尺度日本語版を用いた。この尺度は「少なくとも人並みには、価値のある人である」「色々な良い素質をもっている」「敗北者だと思ふことがよくある（逆転項目）」「自分には自慢できるところがあまりない（逆転項目）」等の10項目からなる。

自意識については、Fenigsteinら⁵⁾が作成した自意識尺度を参考に、菅原⁶⁾が作成した自意識尺度を用いた。公的自意識尺度は「自分が他人にどう思われているか気になる」「世間体など気にならない（逆転項目）」等の11項目からなり、私的自意識尺度は「自分がどんな人間か自覚しようと努めている」「その時々のお持ちの動きを自分自身でつかんでいきたい」等の10項目からなる。

自己効力感尺度は、薬学英語学習に必要と思われる次の8項目の質問を用いて作成した。質問項目は、「私は薬学英語を理解することができる（理解）；私は薬学英語の授業を通じて学習意欲を向上できると思う（意欲）；私は薬学英語に必要な専門知識を統合し、応用できる（応用）；私は薬学英語の勉強を工夫して行っている方だと思う。（工夫）；私は薬学英語の勉強を効率的に行うことができる（効率）；私は薬学英語の単位を取得できると思う（単位取得）；私は薬学英語の予習に力を入れることができる（予習）；私は薬学英語の復習に力を入れることができる（復習）」である。

評定は5件法で行い、合計得点が高いほど自尊感情、自意識、自己効力感が高いことを表すように、各対象者の得点を算出した。 α 係数（表2）から、自尊感情尺度、自意識尺度の内的整合性が男女ともに示された。

3. 結果

3-1 自己効力感の因子分析

8項目の質問項目を用いて、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、2因子解を抽出した(表1)。第1因子は「私は薬学英語を理解することができる」「私は薬学英語の単位を取得できると思う」等、学習の成果に関するものであることから、「学習成果」の自己効力感と命名した。第2因子は「私は薬学英語の勉強を工夫して行っている方だと思う」「私は薬学英語の予習に力を入れることができる」等、学習の方法に関するものであることから、「学習方略」の自己効力感と命名した。第2因子の「私は薬学英語の復習に力を入れることができる」の因子負荷量(.341)が低かったが復習は学習方略の構成概念に必要と考え、除外せずに4項目で尺度を構成することにした。各因子の α 係数(表1,表2)から、第1因子と第2因子において、内的整合性が示された。そこで、各項目を単純加算後平均化した得点を自己効力感の下位尺度得点とした。

表1 自己効力感の因子分析結果

項目	因子1	因子2
第1因子 ($\alpha=.745$)		
私は薬学英語を理解することができる(理解)	.853	-.040
私は薬学英語の単位を取得できると思う(単位取得)	.678	-.073
私は薬学英語に必要な専門知識を統合し、応用できる(応用)	.537	.138
私は薬学英語の授業を通じて学習意欲を向上できると思う(意欲)	.430	.191
第2因子 ($\alpha=.748$)		
私は薬学英語の勉強を工夫して行っている方だと思う(工夫)	-.115	.975
私は薬学英語の予習に力を入れることができる(予習)	.016	.553
私は薬学英語の勉強を効率的に行うことができる(効率)	.317	.489
私は薬学英語の復習に力を入れることができる(復習)	.193	.341
因子間相関	-	.625

3-2 自尊感情、自意識、自己効力感における性差

自尊感情、自意識、自己効力感における性差を検討するため、対応のない t 検定によって男性と女性の平均値を比較した(表2)。公的自意識において、有意差が見られ、女性のほうが男性よりも高い値であった。一方、自尊感情、私的自意識、自己効力感において、有意差は見られなかった。

表2 自尊感情、自意識、自己効力感の性別による比較

尺度・項目	α 係数 ¹⁾	男性 (n=63)	女性 (n=161)	t値 ²⁾
		平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	
自尊感情	.815/.794	3.03±0.63	2.95±0.47	0.937
公的自意識	.867/.881	3.36±0.62	3.59±0.52	-2.771**
私的自意識	.865/.841	3.52±0.60	3.55±0.46	-0.358
自己効力感	.853/.813	3.38±0.63	3.39±0.52	-0.055
学習成果	.798/.798	3.52±0.65	3.52±0.60	-0.004
学習方略	.723/.708	3.25±0.75	3.25±0.56	-0.093
理解	—	3.46±0.88	3.55±0.83	-0.689
意欲	—	3.52±0.82	3.55±0.84	-0.184
応用力	—	3.51±0.82	3.35±0.88	1.253
工夫	—	2.98±0.92	3.06±0.75	-0.601
効率性	—	3.16±0.99	3.04±0.74	1.000
単位取得	—	3.59±0.80	3.64±0.68	-0.496
予習	—	3.38±0.96	3.52±0.83	-1.092
復習	—	3.46±0.91	3.40±0.77	0.469

1) α 係数は、男性/女性の順に示す。

2) ** $p < 0.01$

3-3 自尊感情、自意識、自己効力感の相関

自尊感情と自意識、自己効力感の関連を調べるため、自尊感情尺度と公的自意識尺度、私的自意識尺度、自己効力感尺度及びその下位尺度との相関係数を求めた(表3)。公的自意識において、男性では自尊感情と公的自意識との間に有意な負の相関($r = -.324, P^{**} < 0.01$)が見られた。また、自己効力感において、男性では自尊感情と自己効力感との間に正の相関($r = .365, P^{**} < 0.01$)、自己効力感下位尺度の学習成果と学習方略との間にそれぞれ $r = .250 (P^* < 0.05)$ 、 $r = .395 (P^* < 0.01)$

表3 自尊感情と自意識および自己効力感との相関係数

尺度	自尊感情		
	全体 (n=224)	男性 (n=63)	女性 (n=161)
公的自意識	-.171*	-.324**	-.065
私的自意識	.050	-.089	.144
自己効力感	.195**	.365**	.090
学習成果	.173**	.250*	.132
学習方略	.174**	.395**	.026

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

で有意な正の相関が見られた。

次に、自意識と自己応力感の相関係数を求めた。公的自意識と自己効力感下位尺度の学習成果及び学習方略の相関係数はそれぞれ、男性では $r=-.110$ 、 $r=-.296$ ($p^* < 0.05$) であり、女性では $r=.095$ 、 $r=.173$ ($p^* < 0.05$) であった。男性では公的自意識と学習方略との間に有意な負の相関、女性では有意な正の相関が示されたが、男女とも学習成果との間には有意差が示されなかった。一方、私的自意識と学習成果及び学習方略の相関係数は、男性では $r=.263$ ($p^* < 0.05$)、 $r=.256$ ($p^* < 0.05$)、女性では $r=.314$ ($p^{**} < 0.01$)、 $r=.290$ ($p^{**} < 0.01$) であり、私的自意識と学習方略において性差に関係なく有意な正の相関が見られた。

4. 考察

本研究では、薬学英语学習者の自尊感情と自意識、自己効力感の関連を調べることを目的とした。

自尊感情の性差を検討した結果、有意な性差は認められなかった(表2)。これまで大学生の自尊感情に関して、性差があるとする報告²⁾ や性差がない¹⁰⁻¹¹⁾ とする報告など結果の一貫性が見られていない。そこで、岡田らは自尊感情の性差を報告する50研究に対するメタ分析によって日本人の自尊感情の性差を検討し、男性の方が女性よりもわずかに自尊感情が高く、性差は中高生から成人にかけて小さくなり、高齢者で再びやや大きくなることを報告している¹²⁾。また、吉村は大学生の自尊感情における規定要因としてジェンダー・アイデンティティを検討した結果、男性において自己の性別が社会とのつながりを持っていて、かつ展望性が認識できているという感覚「現実展望的性同一性」を、女性において自己の性別が他者の思う性別と一致していて、かつ一貫しているという感覚「一致一貫的性同一性」を報告している¹³⁾。薬系大学では男女とも薬剤師国家試験に合格し、薬剤師として社会に貢献する展望性がより認識されていると考えられる。よって、ジェンダー・アイデンティティに影響を受けにくい可能性を考慮すると、本研究において自尊感情に性差が認められなかった1つの要因であるかもしれない。

公的自意識及び私的自意識の性差を検討した結果、公的自意識のみ有意な差が得られ、女性の

ほうが男性よりも高い値であった（表2）。自意識の性差や発達段階において、女性は男性よりも公的及び私的自意識が高く、青年期後期にあたる大学生で最も高くなることが報告されている^{6,14)}。本研究において、公的自意識における性差は先行研究と一致していたが、私的自意識では異なる結果が得られた。近年、金子は従来の自意識の構成概念を再検討して作成した改定版自己意識尺度を用いて自意識を検討した結果、私的自己意識において性差が見られなかったことを報告している¹⁴⁾。私的自意識の性差の有無は、今後は改訂版自己意識尺度を用いて検証していくことが必要である。

自尊感情と公的自意識の関連を検討した結果（表3）、男性のみ公的自意識との間に有意な負の相関が得られた。一方、自尊感情と私的自意識との間には男性及び女性ともに有意な差が見られなかった。これらの結果から、公的自意識が高く他者からの評価を気にする男性は、自己を過小評価する傾向が強く自尊感情が低くなると考えられる。また、女性は公的自意識が高くても、自尊感情には影響しないことがわかった。自尊感情と自意識との関連は自尊感情と公的及び私的自意識との間に弱い正の相関を示したものが多いが、未だ一貫した研究結果が得られていない¹⁴⁾。今後さらなる検討が必要であるが、これまで大学生の自尊感情と自意識との関連における性差に関する報告がないことから、本研究結果は新しい知見となる。

自尊感情と自己効力感の関連を検討するために、はじめに因子分析によって抽出された2因子を「学習成果」及び「学習方略」と命名し、自己効力感の下位尺度とした（表1）。次に、自己効力感の性差を検討した結果、有意な性差は認められなかった（表2）。Zimmermanらは、言語と数学に関する自己効力感について検討を行った結果、言語の自己効力感のみに性差が見られ、男性の方が女性よりも高い結果を示している¹⁵⁾。また、伊藤は国語に関する自己効力感について、女性のほうが男性よりも高い値を示したことから、女性と男性における数学と国語の自己概念の違いに言及している¹⁶⁾。本研究において、英語能力に加えて薬学専門知識を必要とする薬学英語に対する自己効力感について、性差が見られないことをはじめて示すことができた。自身を「これでよい」とする自尊感情が高いと「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるか」とする自己効力感も高いと考えられる。そこで、自尊感情と自己効力感の関連を検討した結果、自己効力感と自尊感情との間に有意な正の相関が見られた。次に、性差

について検討した結果、男性のみ有意な正の相関が見られた。また、相関係数から、学習方略 ($r=.395, p^{**} < 0.01$) のほうが学習成果 ($r=.250, p^{*} < 0.05$) よりも自尊感情と強い関連があることが明らかとなった。

自意識と自己効力感の相関係数から、公的自意識と学習方略との間に、男性では有意な負の相関、女性では有意な正の相関が見られた。この結果は、公的自意識の高い男性は「私は薬学英语の勉強を工夫して行っている」等の学習方略に対する自己効力感が低く、女性では高いことが示された。

以上の結果から、薬学英语学習において自尊感情が高い男性ほど他者からの評価はあまり気にせず、学習に対する自己効力感も高いこと、理解や単位取得といった学習成果よりも学習方法を工夫するなどの学習方略に対する自己効力感の方が高い傾向にあることが示された。一方、女性において自尊感情と公的自意識との間に関連が見られなかった。その理由として、「自分が他人にどう思われているか気になる」「人に会う時、どんなふうにあえば良いのか気になる」等の外的評価に敏感な人ほど、薬学英语の学習を工夫し、予習復習を強化する自己効力感を高めて自尊感情の低下を制御している可能性が考えられる。

最後に、本研究の限界として、自尊感情、自意識、自己効力感における性差に関する先行研究は未だ一貫した結果が得られておらず、報告も少ないため本研究結果についての考察が十分とは言い難い。また、薬学英语学習に対する自己効力感尺度の妥当性と信頼性に関して関連変数を用いて十分に検討されていないこと、自尊感情、自意識、自己効力感の調査が1時点であることから、今後、自尊感情と自意識、自己効力感の関連及び性差について、自己効力感尺度の再検討とともに学習過程を考慮して継続的に調査していく必要がある。

謝辞：本研究にご協力頂きました学生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 清田洋一. リメディアル教育における自尊感情と英語学習. *リメディアル教育研究*. 2010 ; 5 (1) ; 37-43.
- 2) 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子. 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*. 1982 ; 30 ; 64-68.
- 3) Rosenberg, M. *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press. 1965 ; 17-18.
- 4) 河内歩美, 梶井芳明. 自尊感情の向上に向けた教育的取り組み—自己評価・他者評価とQ-Uとの関連から—, *東京学芸大学紀要総合教育科学系 I*. 2017 ; 69 ; 155-167.
- 5) Fenigstein A., Scheier M. F., Buss A. H. Public and private self-consciousness : Assessment and theory. *J Consult Clin Psychol*. 1975 ; 43 ; 522-527.
- 6) 菅原健介. 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み. *東京都立大学. 心理学研究*. 1984 ; 55(33) ; 184-188.
- 7) 柴田雄企, 吉戒聡美. 高校生の自尊感情と自己意識. *大分県立芸術文化短期大学研究紀要*. 2015 ; 52 ; 23-29.
- 8) Bandura A. Self-efficacy : Toward a unifying theory Of behavioral change. *Psychological Review*. 1977 ; 84(2) ; 191-215.
- 9) 豊田弘司. 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果. *奈良教育大学学術リポジトリ NEAR*. 2006 ; 15 ; 7-10.
- 10) 遠藤由美. 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実 自己の差異スコアからの検討—, *教育心理学研究*. 1992 ; 40 ; 157-163.
- 11) 豊田加奈子, 松本恒之. 大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究. *東洋大学人間科学総合研究所紀要*. 2004 ; 創刊 ; 38-54.
- 12) 岡田涼, 小塩真司, 茂垣まどか, 脇田貴文, 並川努. 日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析. *パーソナリティ研究*. 2015 ; 24 (1) ; 49-46.
- 13) 吉村健. 大学生の自尊感情におけるジェンダー・アイデンティティの影響. *京都教育大学教育実践研究紀*. 2017 ; 17 ; 125-135.
- 14) 金子智昭. 大学生の自己意識に関する研究 : 改訂版自己意識尺度の作成と心理的適応の関連性. *慶応義塾大学大学院社会学研究科*. 2017 ; 84 ; 15-33.
- 15) Zimmerman B. J., Martinez-Pons M. Student differences in self-regulated learning : Relating grade, sex, and giftedness to self-efficacy and strategy use. *J Educ Psychol*. 1990 ; 82 ; 51-59.
- 16) 伊藤崇達. 学業達成場面における自己効力感, 原因帰属, 学習方略の関係. *日本教育心理学研究*. 1996 ; 44 ; 340-349.

付記 (執筆者の所属機関) 児玉典子 (神戸薬科大学)、細川美香 (神戸薬科大学)